抗議　会社は災害責任をごまかそうとするか

6・11三川鉱落盤災害

職場新聞 "交流" が告発

『現場のミス』で片付けようとする

十八分会（三川・内電）では、昨年の六月十一日三川鉱での落盤災害で、分会員の吉田哲郎さんら六人の仲間を失ったことに強く抗議、会社の責任を追及してきました。同分会の職場新聞『交流』は災害以来毎月一回十一日付の新聞を発行、原因と責任の追及にとりくんでいますが、一月十一日付の同紙は――「現場のミス」で片づけようとする六・一一　三川鉱落盤災害――という見出しで、最近のうごきについてするどく告発し抗議しています。

×　×

六人を一瞬に殺してしまった、六・一一　三川鉱災害の原因と責任の所在を調べていた福岡県警は十二月八日現場担当者三人（大宝施設係長、中西主席係員、故山本係員）をそれぞれ書類送検した。

分会では、十二月十六日に全員集会を開いて、この問題についていろいろ討議した。以下はその内容の一部である。

※鉱長は保安指示をしたということで、その責任をのがれ、指示を守らなかったということで、係長・係員だけが責任を負わされるのはおかしい。

※打柱など、今までが実行されていないものであって、山本係員がたまたま打柱をしなかったというのなら話は別だが……。

※鉱長が保安指示を出したとすれば、その指示の実行をどうチェックしていたのだろうか。

※打柱はあくまで補助的な手段であって、完全な施枠であれば倒れないものだ。

※枠脚に枕木で下駄をはかせるような軟弱盤に、鉱長がいうような打柱や枠縫いが果たして効果があるのか、大いに疑問だ。

※現場の状況は採鉱担当者がよく知っているはずだ。打柱や枠縫いは採鉱がやる作業なのに、施設関係者だけが責任追及されているのは片手落ちではないか。

※変圧器座では枠縫いをする。しなければ変圧器（一・九トン）は据えられない。PC原動機は二・九トンもあるのにそんなことはしない。これを会社幹部が知らないはずはない。生産のために黙認していたのだ。

※会社は断層、水付き、軟弱盤であることを承知の上で〝微断層だから大丈夫〟と断層対策もせず、あえて払口を設定した企画そのものが災害の最大の原因であり、これを決定した幹部の責任こそ追及されるべきである。

他にも意見は多かったが、以上がその大要である。

その後（十二月二十二日）福岡鉱山保安監督局は、四人（酒寄採鉱副長、杉野開発主席係員、大宝施設係長、故山本係員）をそれぞれ書類送検した。

法的な責任追及は、これで一応は処理されていくであろうが、今後会社幹部がどのように災害を反省し責任をとるかが注目される。

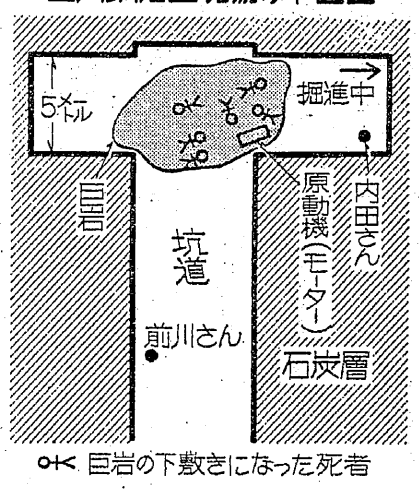
この災害を風化させてはならない。原因と責任を徹底的に明らかにさせてこそ、今後の保安への教訓とすることができるのだ。

その後起きたマイト誤爆事故や電車衝突事故は、一つの災害を全体への教訓として把えようとしない、会社の姿勢がひき起こしたものである。

×

三池労組では、六・一一災害について福岡県警と福岡鉱山保安監督局がそれぞれ書類送検した問題について、一月七日局に出向き見解をただしました。

三川鉱落盤現場の平面図



主張

保安闘争は緊急な課題

一九八一年の国内十大ニュースの一つに、北炭夕張新鉱の大災害がとりあげられたことは、すでに周知の事実である。

また、昨年一年間の頻発災害によって、実に百二十四人にのぼる尊い炭鉱労働者の命が奪われた。

なぜこのように炭鉱の災害が起こるのかという疑問が、市民各層の中にあり、やはり炭鉱は恐ろしいところであり、炭鉱には災害はつきものだという先入観が、つきまとって離れないのもまた当然であろう。

その点では労働組合としても、すべての人びとに炭鉱の実態を率直に訴え、理解と協力を得ることも重要なものとなっている。

炭鉱の労働者にとっては、あらゆる災害を絶滅することは最大の悲願であり、安心して働ける職場を作るために、労働組合としてもあらゆる機会を通じて、保安確立の闘いにとりくんできた。

しかし、われわれの努力も空しく、三池でも昨年の六月十一日、三川鉱において六人の尊い仲間の命が、会社の保安サボによって奪われた。この災害の原因は、重量物をつり上げる場合は、必ず柱打ちなどの補強を行ったのち、作業するように決められているにもかかわらず、通常これが徹底せず、指導の任にある保安技術職員自からが違反を繰り返していたのであり三池炭鉱の保安に対する姿勢が招いた災害であったことは明白である。

いま三池炭鉱では自主保安が叫ばれ、保安は自分で守るものだという思想教育を行っている。「怪我するな、怪我は恥」という言葉で、保安に対する責任を労働者に転嫁する会社の姿勢に対して強く反省を求めるものである。

もともと保安確立とは、鉱山保安法に基づいて山元の労使でとり決めた三池炭鉱の保安規程や保安規則を、それぞれの現場で保安技術職員が守り、指導するとともに不安全要素を事前にチェックし、現場での災害防止対策をたてなければならないものである。それを完全に実施せず、労働者に保安の責任を転嫁するというのは、全くの筋違いだといわねばならない。

いま三池炭鉱では、五百万トン体制を維持・強化するために、少い人員で補充もせず、現場では公出・残業を強要しながら、予算出炭確保にやっきになっており、これが保安無視となり、災害の引き金になっていることは、現場の労働者が認めているところである。

われわれは、このような会社の姿勢を追及しながら、人間の命をもっと大切にさせる保安闘争を強化することは、緊急な課題となっている。

いま政府が進めている、第七次石炭政策の推移は、炭鉱労働者の将来を左右する重要なものであるが、わが国のエネルギー政策の上からも、抜本的な見直しをさせることが必要であり、炭労としても生産重点でなく、生活向上と保安優先に立脚した石炭政策要求を具体的に提起している。

地下産業に働くすべての労働者が、自からの生命を守るために、真の政策闘争を確信もって進めることを強く訴えるものである。

※　※

なかま

十四分会（三川）中山　茂さん

▼…中山さんは昭和二十二年二月に宮浦鉱に入社。坑内仕繰員（本線修繕）ひとすじ。昭和五十二年の三川鉱への統合によって開発常一番の仕繰員となり、現在まで三十四年間頑張ってきました。

昭和三年十一月三十日の生まれですから、定年退職まであと二年足らず。白いスクーターで通勤。小柄な体ですがスタミナ十分。職場の同僚からは「茂ちゃん」と呼ばれ親しまれています。なにごとにもまじめで、温厚な性格ですが、いまは委員をやっており、分会では労働担当。各人の賃金のデーターを綿密にしらべています。

▼…酒はまったく駄目で、送別会などではもっぱらジュース。分会の旅行では、その堅実さがかわれて会計係をつとめます。唯一の趣味はパチンコ。永年きたえた腕は相当なもので、みんながうらやむほど。組合の行事や分会の仕事がないときは、まず夕方家にいることはないでしょう。

▼…今いちばん思うことは、「みんなが自分のことだけ考えるのではいかん。やっぱり仲間同志つよく団結しなければ」「炭鉱もこれからますます大変だし、組合運動に目をむけてほしい」とこんどのことに気を配るのです。

×

（宮原正満・記）

中山さんの住所は、大牟田市西浜田町四の社宅。妻のミチヨさん、長男、婆ちゃんの四人ぐらし。

さる十二月二十五日開催された、三池労組第八回委員会で、十八分会草田委員から労働戦線統一問題についての動議が出され、審議の結果満場一致で承認されました。文案修正、委員の署名捺印の上炭労宛要請書として提出されました。以下、その全文です。

一九八一年十二月二十五日

三池炭鉱労働組合
第八回委員会

日本炭鉱労働組合
中央執行委員長　野呂潔　殿

要請

きびしい情勢のなか、炭鉱労働運動の前進のために日夜ご健闘いただき、深く敬意を表します。

さて、日本の労働運動に多大の影響を与える労働戦線統一問題が議論されて以来、総評の混迷が深まるなかで、さる十二月十四日、準備会の発足に至る経過を、私たちは注意深く見守ってきました。そして、表面はどうであれ、実態は、日本の労働運動を指導してきた総評の解体、弱体化を企図し、同盟主導の右翼的労働運動への再編成を狙っていることは明白であるといわざるを得ません。

ひるがえって、炭労の場合、結成以来今日まで一貫して日本の炭鉱労働運動を指導し、六三闘争、三池闘争など幾多の大闘争のなかで、光栄ある伝統と歴史を保持してきました。

三池闘争以降私たちは、会社の苛酷な分裂政策のもとで日夜苦痛を強いられながらも、総評・炭労の旗に包まれながら、頑強に生命と権利を守る闘いを進めてきました。これら数々の闘いのなかで私たちは、三池新労組による分裂下の苦渋を数多く経験してきました。

このような情勢のなかで、同盟主導の労働戦線統一に組みすることは、両手両足をもぎ取られるようなものであり、CO患者・遺族にはそのおもいが一層深いのであります。

さらに、夕張新鉱の大事故にみるまでもなく、現在の石炭資本は、独善的な生産第一主義・保安無視の政策を強行してきており、炭鉱に働く労働者にとって、現在ほど炭労の強力な指導性を必要としているときはありません。

資本にゆ着し、右翼的な労働運動をめざす全炭鉱を、闘う炭労へ統一させることこそ今日的な課題であり、このことなくして炭鉱労働者の生命と権利を守る道はないと思います。

以上のような私たちの決意を十分にご理解いただきまして、準備会参加の方針を撤回され、同盟主導の労働戦線統一への不参加決定を、三池炭鉱労働組合の決議機関構成員の署名を添えてお願いするしだいであります。

以上

※　※　※　※